

# ANNUAL REVIEW

2017



## 2017年度 年次報告書

2017年1月1日~12月31日

一般社団法人

バードライフ・インターナショナル東京

# Contents



## 環境保全活動

種の保全	3
渡り鳥の保全	5
森林と湿地の保全	7
海鳥・海洋の保全	9
能力形成・生計向上	11



## 環境保全活動の成果と影響の評価ツール (PRISM) の開発

13



## チャリティイベントの開催

15

南太平洋の島々の保全	16
------------	----



## 収支報告

17



## 個人・団体からの支援

18



▲ 2017年に実施されたプロジェクトの活動地  
合計17カ国

# HIGHLIGHTS 2017

バードライフ・インターナショナル東京（以下、バードライフ東京）は、2017年よりバードライフ・インターナショナル本部（英国・ケンブリッジ。以下、バードライフ・インターナショナル）直轄となり、名誉総裁の事務局として、また地域の枠を越え、グローバルな活動を展開する体制へと変更されました。

企業や他団体との連携を通し、2017年度は17カ国で現地のパートナー団体と共にプロジェクトを推進することができました（上図）。

企業と連携した日本の渡り鳥の生息地保全や

環境保全支援など新たなプロジェクトも立ち上げました。また、経団連自然保護基金25周年特別基金の支援により、日本環境教育フォーラム、コンサベーション・インターナショナル・ジャパンと協働でアジア・パシフィック地域での人材育成プロジェクトを開始するなど、より大規模でインパクトのある活動も開始しました。さらには、中小規模の環境保全プロジェクトの成果や影響を評価をする「PRISM」ツールキットの開発・公開を行うなど、多岐にわたる活動と新たな領域へのチャレンジが実った年となりました。



# SPECIES CONSERVATION

タイ・パークタレーで観察されたヘラシギ（右手前）

## 種の保全



### ヘラシギの保全

スプーンのような愛らしいクチバシをもつヘラシギ（絶滅危惧 IA 類）は、バードウォッチャーの間でも特に人気が高い鳥です。しかし、主要な生息地である干潟の減少などにより急激に数を減らし、現在は全世界でも 500 羽程度しか生息していません。バードライフ東京は、トヨタ環境活動助成プログラムの支援により、タイ湾西岸の塩田地帯パーク・タレーにおいて、パートナー団体 BCST (Bird Conservation Society of Thailand) と協働で、ヘラシギの生息地保全のためのプロジェクトを展開しています。活動の一環として放棄塩田を水鳥の生息地として復元した結果、2017年12月には、調査地内で7羽のヘラシギを含む 18,000羽の水鳥が観察されました。さらにエコツーリズムの推進に向けて地域住民が共同運営するビジターセンターを開設

するなど、保護に向けた機運を高めることができました。



### ヒガシシナアジサシの保全

世界的な絶滅危惧種であるヒガシシナアジサシ（絶滅危惧 IA 類）について、2009年から2015年まで中国蕪山列島の繁殖コロニー復元に成功するなど大きな成果を挙げてきました。2016年度からはインドネシアのパートナー団体 Burung Indonesia と協力し、詳細な生態を解明し、越冬地や渡りの中継地での保護を促進するため、越冬状況の調査に取り組んできました。2017年は、ナショナル・ジオグラフィック協会の支援により、越冬地調査のほか、人工衛星発信機を利用した追跡プロジェクトの準備を開始し、2018年からプロジェクトが本格的に稼働します。





絶滅危惧種に指定されたシマアオジ

## シマアオジの保全

シマアオジは、かつて北東アジアやユーラシア大陸に広く分布し、日本では北海道で普通に観察することができる鳥でした。しかし、中国や東南アジアにおける食用目的の大規模な密猟により激減し、2017年にIUCN（国際自然保護連合）のレッドリストで絶滅危惧 IA 類（CR）に選定されました。日本でも危機的な状況になっています。そこで、地球環境基金の支援により、バードライフ東京が中心となり、日本、ロシア、中国、韓国など10カ国からなるシマアオジ保全の国際プロジェクトを立ち上げました。2017年には日本の個体群との関連性を調べるため、サハリンで生態調査が行われました。



## レッドリスト対象種保護のための車両提供プログラム

トヨタ自動車株式会社の支援により、絶滅危惧種の保全活動をより効率的・効果的に行うため、バードライフのパートナー団体に車両を寄贈するプログラムを開始しました。2016年度より5年間にわたり、合計10台の車両が10カ国のパートナー団体に寄贈されます。2017年は、ブラジル、ベトナムのパートナー団体へ車両を寄贈しました。ブラジルではカオグロナキシャクケイ（絶滅危惧 IB 類）、ベトナムではコサンケイ（絶滅危惧 IA 類）の保護プログラムで活躍しています。



ブラジル熱帯林での保全活動の様子



# MIGRATORY BIRDS CONSERVATION

北海道のフライウェイサイトに飛来するマガン

## 渡り鳥の保全



### 東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ

日本を通過する渡り性水鳥が飛来するルートは、東アジア・オーストラリア地域フライウェイとして知られており、オセアニア、東南アジア、北東アジア（日本、中国と韓国）及びアラスカが含まれています。国境を越えて飛来する渡り性水鳥の保全のためには、フライウェイに含まれる国々の協力が必要不可欠となります。バードライフ・インターナショナルは、渡り性水鳥保全のための国際保全ネットワークである、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ（EAAFP）のパートナーとして活動しています。また日本では、フライ

ウェイサイトとして 33 湿地が登録され、バードライフ東京が本パートナーシップの日本事務局の役割を担い、環境省や関連 NGO と共に活動に取り組んでいます。

2017 年は、西日本地区にあるフライウェイサイトの管理者を対象とした環境省主催のワークショップを滋賀県長浜市で開催しました。12 の登録地から行政担当者や NGO 職員が集まり、渡り性水鳥や生息地保全のために必要な人材育成等について、議論を行いました。



## 企業によるフライウェイサイト支援

日本におけるフライウェイサイトの保全活動を促進する「フライウェイサイト支援プログラム」を立ち上げました。

パシフィック・センチュリー・プレミアム・ディベロップメントの支援により、北海道の5カ所のフライウェイサイト（宮島沼、クッチャ口湖、霧多布湿原、厚岸湖・別寒辺牛湿原、野付湾・野付半島）の活動を、ダウ・ケミカル日本の支援により、新潟県の2カ所（福島潟、瓢湖）および岡山県の1カ所（吉備中央町）の計8カ所での保全活動を開始しました。



## アジア湿地シンポジウムでサイドイベントを開催

「アジア湿地シンポジウム2017」（佐賀県で開催）にEAAFP事務局及びラムサールネットワーク日本と共同で参加、サイドイベント「渡り性水鳥の減少と生息地の環境変化—シギ・チドリ類とその生息地の干潟を指標に—」を開催しました。サイドイベントでは、異なる年代や地域・国のステークホルダーと、過去から現在における日本の干潟とそれに関わる人間活動の変遷やシギ・チドリ類の生息状況の変化を共有することを目的としました。当日は80名を超える参加者が集まりました。

この活動は公益信託大成建設自然・歴史環境基金の支援により実施されました。



## 渡り鳥等保護条約会議への参加

日本はロシア、アメリカ、中国、韓国、オーストラリアとそれぞれ渡り鳥条約を締結しています。渡り鳥条約では、各国政府と日本の環境省の間で2年に一度、条約会議が開催され、共通の渡り鳥の保護のための情報交換や共同研究の推進が議論されます。2017年11月には環境省主催の第11回日口渡り鳥等保護条約会議を開催。パードライブ東京は日本代表団の事務局並びに専門家として参加し、コクガンの渡り経路調査と保護に向けた共同研究を提案しました。





マレーシアのマングローブの植林の様子

## 森林と湿地の保全



### マングローブの森の再生

マングローブ林は開発等により、年間でその面積の1%という速さで急激に減少しています。これは世界の森林消失の3～5倍もの速さと考えられています。バードライフ東京は、株式会社リコーの支援により、マレーシアとメキシコでマングローブの森の再生プロジェクトを進めています。マングローブは、地域の生物多様性だけでなく地域住民の生計にとっても欠か

すことのできない重要な資源です。マレーシアでは2011年からマレー半島の北央セラゴール沿岸域を対象に、メキシコでは2015年からメキシコ南部のオアハカ州とチアパス州を対象に再生活動を実施しています。







## "Plant a Tree for Africa"

ブルキナファソ北部のウルシ湖周辺では、森林の劣化と砂漠化が大きな脅威となっています。その結果、この地域に暮らす住民にとって、水や耕作可能な農地の不足が問題となっています。さらにこの地域は、100種・20,000羽以上の鳥類が生息する重要自然環境 / IBA (Important Bird & Biodiversity Area) に指定されており、鳥類や生物多様性にとっても重要な場所となっています。そこで2011年からリコーの支援によりユニークな植林活動を行っています。植林本数は、リコーがスポンサーとなっているプロゴルフトーナメントのプレイヤーの成績によって決められます。2017年には約13,000本を植林し、これまで述べ約67,000本を植林しました。



## インドネシア・ハラパンの森の保全

インドネシア・スマトラ島の南部は、世界屈指の生物多様性が豊かな地域となっています。しかし1970年代から大規模な森林破壊が進行し、近年ではパームオイル生産のためのアブラヤシのプランテーション農園開発が進んでいます。バードライフ東京は、同地域の熱帯雨林を守るため、インドネシア政府の「生態系再生コンセッション (ERC: Ecosystem Restoration Concession)」制度を活用し、約10万ヘクタールの森林を守る「ハラパンの森プロジェクト」を2006年に立ち上げました。2017年には、富士通株式会社の支援により、ICTを用いた森林パトロールとモニタリングを開始しました。



## 東南アジアの湿地保全

カンボジアのストーン・セン湿地は、東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖の南端に位置し、IBAに指定されています。多くの絶滅危惧種の生息地となっているだけでなく、地域住民にとって欠かせない自然の恵みを供給していることから、この湿地をカンボジアで4番目のラムサール登録湿地とするための支援を行っています。2017年には全国会議を開催し、登録に対する関係省庁からの承認を得るとともに、同湿地を管理するレンジャーを対象に、モニタリングに関する研修を行いました。



## インドネシア・ニューギニア島のIBAの選定

バードライフ・インターナショナルは、これまで世界200カ国で1万2000カ所ものIBAを選定してきました。ニューギニア島の西半分には相当する西パプア州とパプア州には世界でも有数の森林が残り、固有の生き物が多数みられるものの、IBAの選定がされていない数少ない場所です。バードライフ東京とBurung Indonesiaは、この地域で鳥類をはじめとした生物調査を開始しました。



# SEA BIRD AND MARINE CONSERVATION

アホウドリ

## 海鳥・海洋の保全



### マリーン IBA 目録の出版

マリーン IBA（重要海洋環境）事業は、バードライフ・インターナショナルが世界各国のパートナー団体と一緒に取り組んでいる国際事業です。IBA のコンセプトを海洋にまで広げたもので、海鳥を指標に生物多様性の高い海域を選定し、海洋と海鳥双方の保全に貢献することを目的としています。

2016 年、バードライフ東京はティファニー財団の支援により、日本野鳥の会と協力して 27カ所の海域をマリーン IBA に選びました。2017年には、これら 27カ所のマリーン IBA の情報を日本語と英語でまとめ、それぞれマリーン IBA 目録として出版しました。



日本のマリーン IBA をまとめた目録



北海道の地元漁師と協働で、刺し網漁での海鳥の混獲を回避する実験を行った。

## 遠洋マグロはえ縄漁における海鳥の混獲の削減

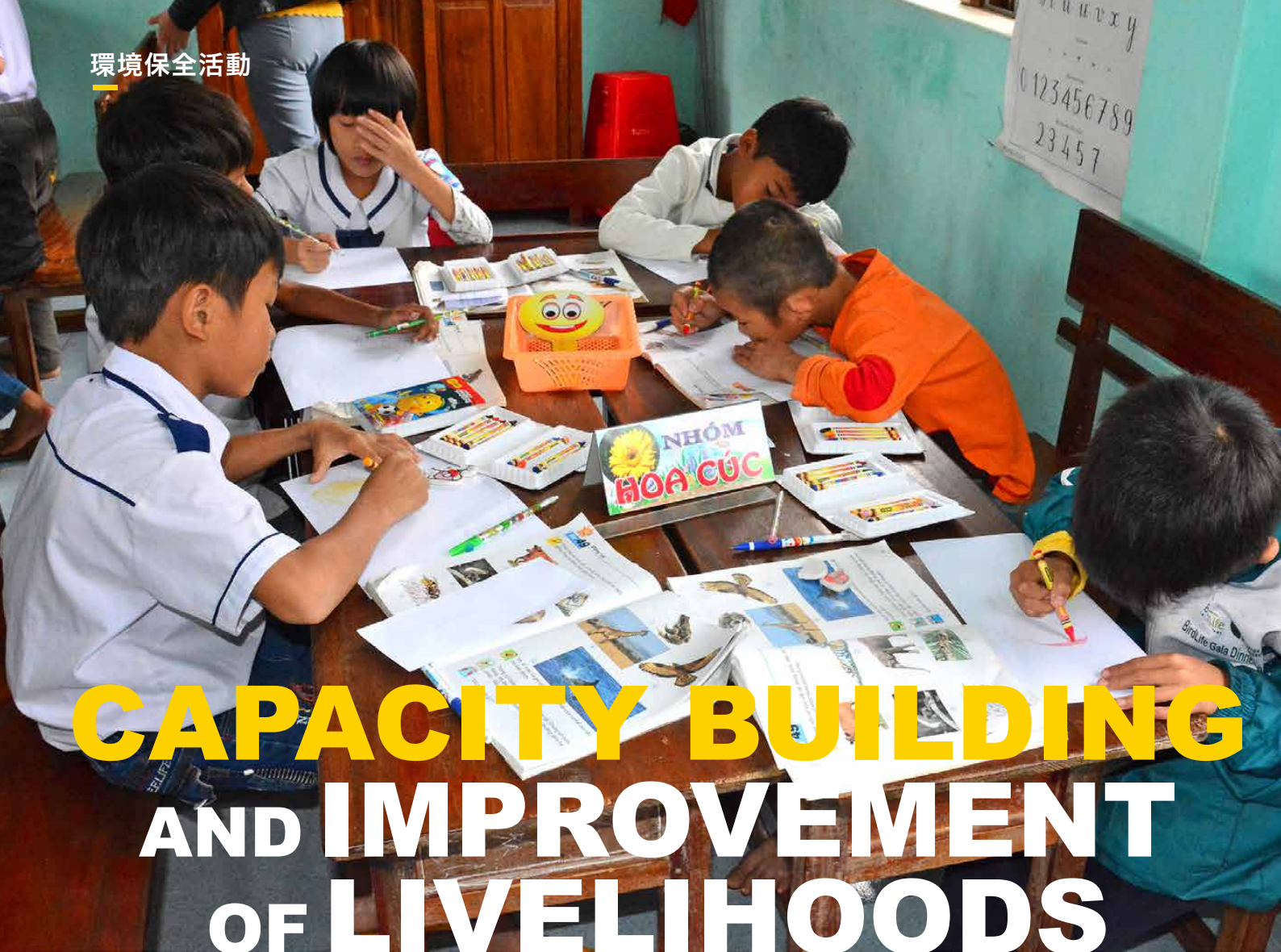
鳥類の中でも海鳥は急激に数を減らしています。アホウドリに至っては22種のうち15種で絶滅が危惧されています。最大の脅威は漁業による混獲（偶発的に釣針や魚網にかかってしまうこと）で、アホウドリのような大型の海鳥ははえ縄による漁で混獲されるため、マグロはえ縄漁が盛んな日本と台湾では早急な保全対策が求められています。デビッド&ルシル・パッカー財団の支援により、2018年にモーリシャスのポートルイス港に立ち寄る台湾のはえ縄船に、海鳥の混獲回避対策を施すように呼びかける普及啓発活動を行う予定で、中華鳥会（台湾のパートナー）とモーリシャス野生生物協会（モーリシャスのパートナー）と事業の計画を進めました。また、海鳥の種の同定技術を高めるワークショップをニュージーランドで開催し、日本と台湾の研究者を招待しました。これにより、国際会議で提出される海鳥の混獲データの精度があがることが期待されます。



## 海鳥と刺し網漁の共存をめざす取り組み

年間40万羽の海鳥が刺し網漁業（流し網漁を含む）で命を落としています。特に北太平洋は最も被害が深刻な海域であり、毎年14万羽の海鳥が混獲されています。北海道の周辺には約90種の海鳥が生息し、刺し網漁も盛んなことから、その影響が懸念されています。限られた情報しかありませんが、刺し網漁による混獲はウミガラスとエトピリカの数著しく減ってしまった原因の一つとして考えられます。2016年、経団連自然保護基金の支援により、海鳥の混獲回避対策の開発を目指し、日本野鳥の会との共同事業を開始しました。本事業は羽幌町、環境省、地元の漁業共同組合と多方面からの協力を得ながら進めています。2017年は海鳥の混獲データを集めるとともに、改良した混獲回避対策の洋上実験を行いました。その結果、改良型の混獲回避対策は、漁業者にとっても使いやすいことがわかりました。今後も地元の漁業者の協力を得ながら、海鳥の保全を進める計画です。





# CAPACITY BUILDING AND IMPROVEMENT OF LIVELIHOODS

ベトナムにおける環境教育授業の様子  
(SATO YAMA UMI プロジェクト)

## 能力形成・生計向上



### SATO YAMA UMI プロジェクト

SATO YAMA UMI プロジェクトは、経団連自然保護基金の25周年記念特別基金助成事業の支援のもと、日本環境教育フォーラム、バードライフ東京、コンサベーション・インターナショナル・ジャパンによる協働プロジェクトとして、2017年に立ち上がりました。本プロジェクトは、アジア・パシフィック地域の6カ国で、持続的な社会の実現に向けた次世代の人材育成プログラムを開始します。バード

ライフ東京は、カンボジア、ベトナム、ブータンの3カ国において、現地パートナーのバードライフ・カンボジア・プログラム、Viet Nature Conservation Centre、ブータン王立自然保護協会（RSPN）と共同で実施します。2017年は各国でプロジェクト立ち上げの準備、2018年より本格的に始動する予定です。





## ミャンマー環境教育センター建設

近年、ミャンマーのモッタマ湾には世界的な絶滅危惧種のヘラシギ(絶滅危惧IA類)が多数越冬していることが明らかとなり、保全対策が急がれています。バードライフ東京は、ミャンマーのパートナー団体 BANCA(Biodiversity And Nature Conservation Association)と協働で、モッタマ湾の自然環境を学ぶ環境教育センターを建設しました。教育センターは来訪者がヘラシギやモッタマ湾の自然について学ぶビジターセンターとしての役割を持つほか、自然観察ガイドの養成や、地域の学校の課外授業の受け入れに活用されています。BANCAの継続的な努力により、2017年5月にモッタマ湾はラムサール条約湿地に登録されました。環境教育センターは、今後も普及啓発や環境教育、調査研究などの拠点として活用されます。

## インドネシア・フローレス島における生計向上

インドネシア・ジャワ島の東に位置するフローレス島は、多くの固有種が生息し、豊かな生物多様性が残された島です。しかし、地域コミュニティの貧困に起因する森林資源の過剰な利用により、森林の劣化が進んでいます。バードライフ東京は、トヨタ環境活動助成プログラムの支援により、Burung Indonesiaと持続的な森林資源の利用を促進するプロジェクトを実施しました。アグロフォレストリーにより栽培されたキャンドルナッツをまとめて買い取り、卸売業者と取引を行う協同組合を設立した他、価格の安定化と品質向上のための能力形成と啓蒙活動を実施しました。プロジェクトは大きな成果をあげており、キャンドルナッツの価格の安定化と収益の増加により、地域住民の生計向上に寄与することができました。



新設されたミャンマーの環境教育センター






# EVALUATION METHOD FOR CONSERVATION PROJECTS

住民からのヒアリングと意見交換  
パイロット評価の様子

## 環境保全活動の成果と影響の 評価ツール(PRISM)の開発

 愛知目標や SDGs の達成に向け、民間セクターや NGO などあらゆるステークホルダーの環境保全活動に対する取り組み強化が求められています。中でも環境保全活動の成果や有効性を評価し、今後の活動や計画の改善を図ることの重要性が指摘されています。環境保全活動の成果を評価する手法は種々開発されていますが、その多くは大規模プロジェクトを対象としており、予算や時間が限られる中小規模のプロジェクトには適用できませんでした。バードライフ・インターナショナルは、2016 年よりトヨタの支援により、UNEP やケンブリッジ大学などの国際組織と

協働で、中小規模プロジェクト<sup>1</sup>の成果を評価するツール、PRISM (**P**ractical methods for evaluating the outcomes & **I**mpacts of **S**mall - **M**edium sized conservation projects) を開発しています。

2017 年には、タイとインドネシアで、PRISM を活用したパイロット評価を実施しました。これらの結果をもとに、「PRISM ツールキット」をとりまとめ、2017 年 11 月に特設ウェブサイト(英語：<https://conservationevaluation.org/>)にて公開しました。



▲ PRISM ツールキットの開発団体及び支援団体

バードライフ・インターナショナル、ファウナアンドフローラ・インターナショナル、UNEP - WCMC、英国王立鳥類保護協会、英国鳥類学協会、熱帯生物学協会、WWF、コンサーベーション・エビデンス、ケンブリッジ大学

プロジェクトを実施する団体やその活動を支援する組織・団体が、PRISM ツールキットを活用することにより、環境保全活動の成果を見える化し、適切な評価と改善を可能にすることが期待されます。今後、印刷物やシンポジウムを通して、PRISM ツールキットの積極的な展開を図っていきます。

- \*1 PRISM でターゲットとするプロジェクトの規模
- ・活動予算が 1,000 万円以下
  - ・活動期間が 5 年以下
  - ・少人数のプロジェクトチーム
  - ・費用や時間などの制限で評価が困難なプロジェクト



PRISM ツールキットの表紙






# GALA DINNER

東京ガラ・ディナーの様子

## チャリティイベントの開催

 バードライフ東京は、多様な生き物やその生息環境を守るため、毎年東京と大阪でチャリティーのガラ・ディナーを開催しています。2017年は、南太平洋の島々の環境保全を主目的に開催しました。3月10日のスプリングガラには591名の方々のご参加を得て1,373万円の収益金を、10月27日の東京ガラ・ディナーでは、

618名の方々のご参加を得て2,900万円の収益金を集めることができました。収益金は南太平洋の島々の保全に2,600万円を拠出したほか、緊急用のプール金として500万円を計上し、残りはミャンマー、インドネシア、ベトナム等の活動に充当されています。





# SUPPORT FOR PACIFIC ISLANDS BY GALA DINNER

ガラ・ディナー  
で支援を行う  
南太平洋の島々

## ガラ・ディナーの支援活動 —南太平洋の島々の保全—



青い海、白い砂、さんご礁が広がる南太平洋地域はこの世の楽園と呼ばれ、島々には固有の生き物が豊富にみられます。しかし、外来種や移入種など、外から持ち込まれた生き物に対し競争力が弱く、絶滅した種が多数あります。鳥を例にあげれば、過去700年間、絶滅の割合が世界の他の地域より高いという結果が出ています。

バードライフ・インターナショナルは10年がかりで島からネズミ、ヤギ、ネコなどの外来種を駆除することに成功しました。ガラ・ディナーの支援により、フレンチポリネシア、フィジー、パラオ、クック諸島の4カ国で環境復元活動を行い、移入種の侵入を防ぐため、水際での予防措置を強化することになりました。

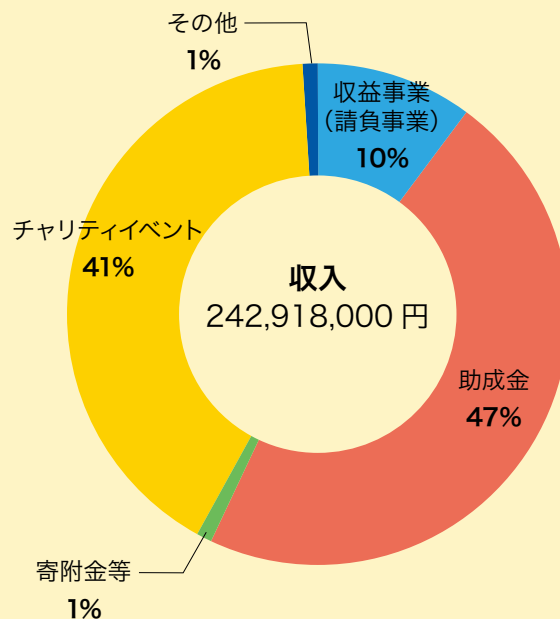


# Finances 2017

2017年度の収支報告は以下の通りです。

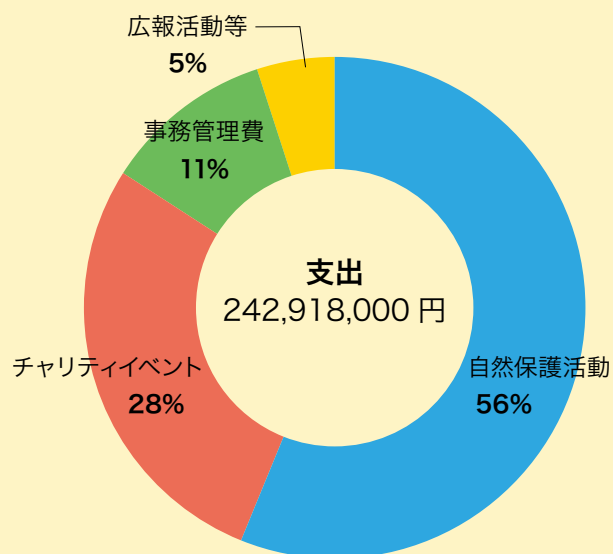
## INCOME

収入



## EXPENDITURE

支出



# MAJOR SUPPORTERS

バードライフ東京には、個人で活動を応援するサポーター制度や、法人賛助会員制度があります。その他にも、絶滅危惧種の保護活動に里親として

関わっていただく RBC（レア・バード・クラブ）という会員制度があります。



## レア・バード・クラブ

バードライフ・インターナショナル主導の制度で、世界各地に会員がおり、日本では約20名の方が会員になっています。一人一人が絶滅危惧種の里親として、保全活動に加わっています。9月5日には、メンバーやゲストが、米国の生物学者であるトーマス・E・ラブジョイ博士との交流会を楽しみました。



## サポーター制度

“Friends of BirdLife”は、一口5,000円のサポーター制度です。半分の2,500円を環境保全活動に、半分をバードライフの運営費にあてます。2017年9月からは、ブラジルでペットとして密猟された絶滅危惧種の鳥類を保護し野生に戻す「フライト・プラン」や、「ヘラシギの保全」、「ケープペンギンの保護」をはじめとする支援を行いました。



## ネット募金によるご支援

Yahoo! ネット募金を利用して寄附を募っています。寄附の場として、また一般の方にバードライフ・インターナショナルの活動を知っていただくよい機会となっています。2017年は3つのプロジェクト「フライト・プラン」、「ヘラシギの保全」、「ケープペンギンの保護」への寄附を呼びかけ、合計90万円以上のご支援をいただきました。



## 法人賛助会員

一般の企業や団体会員の皆様からも、温かいご支援をいただいております。2017年の法人賛助会員は、以下の通りです。(50音順・敬称略)

- ・アルファー食品株式会社
- ・出雲大社
- ・出雲大社文化事業団
- ・寒川神社
- ・伏見稲荷大社
- ・北海道神宮
- ・真清田神社



## その他のご支援

下記の方々からも温かいご寄附をいただきました。(50音順・敬称略)

- ・株式会社セディナ
- ・株式会社ワンステップ
- ・株式会社 STEP
- ・シドニアコンサルティング株式会社
- ・BLS（バードライフ・サポーターズクラブ）

# Together we are BirdLife International

## Partnership for nature and people



一般社団法人  
バードライフ・インターナショナル東京

〒103-0014  
東京都中央区日本橋蛸殻町 1-13-1  
ユニゾ蛸殻町北島ビル1階  
TEL : 03-6206-2941  
FAX : 03-6206-2942

代表者：代表理事 鈴江恵子  
設立：2002年4月

<https://tokyo.birdlife.org>